

に列車の外の扉にしがみつぎ、手足の痛みを耐え抜いていたが、途中駅で我々は降ろされてしまいました。

しかし、検問所で日本人は隔離留置されてしまいました。したが、用便に行くふりをして、混雑の人の群に紛れ込みました。薄暮の中で服装も汚れた鮮服であったので追跡されることなく逃げ出すことができました。それからは保安隊に脅えながら、幾日歩いたか、食糧はどうしたか、今は記憶がありませんが、恐らく民家の人の恵みで生き永らえたのでしよう。

東豆川では橋にはソ連の検問所あり、渡船場では保安隊に連行を求められました。いくら弁解しても聞き入れてくれない。ここまで来たのに捕まるとは、今までの苦労は水泡となる。そうかといって逃げ出すこともできないと悲痛な思いでした。

途中で前方から復員してくる若い兵隊に出会い、その人に正直に話すと、彼は何か、ニコニコしながら保安隊に話をして私を渡し場に連れて行き、船頭に渡し賃を払ってくれました。まさに、私にとって救いの神であり、今でも忘れることができません。

無事対岸には保安隊もいないし、民家の人は皆親切にいたわってくれました。その時は何も分かりませんでした。それが三十八度線であったのです。囚徒を出て二十数日、山野に寝、食うや食わずの避難行で、人の情けに助けられ、こんなに早く南鮮に着くとは夢にも思わぬ幸運でした。数日後、京城の居留民団の温かいお世話を受け、釜山經由、仙崎上陸し、九月二十日、懐かしい我が家に復員することができました。

軍人や開拓団の多くの人々が帰らぬ人となり、あるいは、シベリアや中国八路軍に抑留された人々の労苦を思うと、今日に至るも胸の痛みを感じ続けております。

勤労報国

平壤で戦車攻撃訓練

栃木県 船山 剛

私は男六人、女三人の九人兄弟の長男として生ま

れ、父は傭職人でした。貧乏子だくさんの常として、高等小学校を卒業すると直ちに出稼ぎに出て食い扶持を減らすと共に、少しでも現金を稼ぎ家に送金せねばならなかった時代でした。

父は昭和五十四（一九七九）年に死去、母は現在九十五歳で老人ホームに入っています。

私は軍隊に入るまではほとんど家におらず、出稼ぎが続きました。昭和十四年は日光市清滝で道路工事の仕事でトロ車押しで一日二円七〇銭、滝本組の親方の家に寝泊まりしての生活でした。昭和十五年は東京湾の埋立て工事で、一日四十台に貝殻混じりの泥土を運んで二円八〇銭。昭和十六年の前半は北海道で勤労報国隊員として室蘭製鉄所で鉱石砕きで一日三円五〇銭。後半は埼玉県で出稼ぎで製鉄炉作業。昭和十七年九月、日光製鋼所で勤労報国隊で埋立て工事に従事しました。

昭和十八年には足尾銅山小滝坑内に入り鉱石を坑車に積み込む仕事に、残業して一日五円になりました。朝鮮人労務者も一緒でした。坑内は十二月でも禪一つ

の裸で作業しました。

昭和十八年徴兵検査の結果、第二補充兵役に編入され、同十九年七月、教育召集のため東部第四十八部隊に入隊。直ちに下関出港、釜山上陸、二十日朝鮮平壤着、朝鮮第四十二部隊に入隊しました。鉄筋コンクリート造りの三階建ての立派な兵舎でした。三カ月間、対戦車攻撃の演習に明け暮れました。召集兵は栃木・茨城・群馬出身が多かったです。急造爆雷を背中に背負って「タコ壺」を掘って隠れていて、敵の戦車が近づいたら飛び出して戦車の下に爆雷を突っ込む訓練ですが、体もろとも飛び込まねば成功しない肉弾戦法でした。

十月末に家に帰りましたが、今にして思えば当時関釜連絡船の航行は相当危険な状態になっていたのに、なぜわざわざ朝鮮まで連れて行ったのか疑問が残ると言えよう。

家に帰って早速ワラ仕事でムシロ編み。借地一町歩で小作の他日雇いの手間稼ぎに終始しました。昭和二十年に入ると戦局はますます厳しく、召集を覚悟して

いたら果たして二月召集が来て、二十三日に宇都宮東部第三十六部隊に入隊。直ちに磯第四八四七部隊に編入され、二十六日出発。三月十二日伊東で観光船に乗せられ伊豆大島に上陸、大島防衛の任務に就きました。大出中隊に所屬でした。

大島には第三二一師団（磯）が新設され陣地構築が昼夜兼行で急がれていました。米軍上陸に備えて海岸には深さ三メートル幅三メートルの対戦車壕が掘られました。

七月十五日、中隊は三宅島に行くことになり、大島のハブ港から暁部隊の上陸用舟艇三隻に分乗して出航しましたが、折悪しく低気圧の襲来で一隻が大波を受けて転覆沈没する事故が起き、残る二隻がやっと七月十六日、三宅島北端カミチャク村大久保浜に着いたのです。

三宅島には（境）独立混成第六十六旅団が、やはり海岸防備の陣地構築に大わらわの状況でした。

大島でも三宅島でも至る所穴だらけでモグラ部隊と
言われていました。防空壕や戦車壕、隠蔽壕などを盛

んに掘っていました。

私は、境兵団原田隊に配属され三宅島のイガヤ部落に行つて野積みにされている武器・弾薬・被服を警護する衛兵役を命ぜられました。

米空軍のP51が時に飛来して機銃掃射を受けました。B29は遙か上空をゆつたりと飛んで行きますが、対空砲火の貧弱なこちらはただ見守るだけでした。

島の生活は、島民が疎開して空家になっている建物を軍が接収して兵舎に使用していました。一番苦勞したのは食糧が不足したことです。食糧は長期戦に備えて最小限に絞られ、不足分を山芋、野草を採集したり、マムシ等を補食していました。

八月十五日終戦となり、ようやく復員となり三宅島を去ることになりましたら倉庫が解放となり、あらゆる物資が溢れるように有るのにびっくりしました。

白米を毎日腹いっぱい食べ、甘味品も好きだけ頼張り今までの栄養不良が逆に栄養過多になり、ぶくぶく肥えた兵隊がいっぱいになりました。

被服も新品に着替えました。武器弾薬の処分は爆破したり海に投棄したりしたのだと思います。

八月十六日、三宅島出帆、十七日伊東上陸、召集解除となりました。途中の都市の丸焼けの惨状に息をのみながらも無事帰宅し、家族全員無事を喜び合ったのを覚えています。